

황석영 (黄皙暎) 作
『森浦 (삼포) へ行く道』

2015/05/17 金子博昭

◎作家・황석영 (黄皙暎) について

1943年満州生まれ。1947年からソウルで暮らす。

高校中退後、『思想界』新人文学賞に入選。

日韓会談反対デモで逮捕され、その後は寺男や日雇労働などで各地を転々。海兵隊に入隊しベトナム戦争に従軍。

1970年から本格的作家活動開始。

1989年、朝鮮文学芸術総同盟の招きで訪北。独・米亡命後、1993年帰国。

即逮捕され有罪判決を受け、1998年まで懲役刑に服する。

その後も作家活動を続け、産業化社会を背景にした労働者や都市貧困層の生活を描いている。

【代表作】長編『장길산』(1984)、『바리데기』(2007)ほか

◎作品について

○概要

- ・1973年に発表された황석영の代表的な短編のひとつで、急速な産業化を背景に社会から疎外され抛り所を失っていく労働者らの姿をありのままに描き出した作品と評価されている。1975年に映画化された。

○主な登場人物

- ・노영달 : 工事現場を渡り歩く流れ者。仕事を失い行くあてに困っている
- ・정氏 : 영달より5歳ほど上。現場を辞めて故郷の삼포に帰ろうと考え中。
- ・이점례 : 別名백화。22歳。3年前に家出し体を売るなどで世間を渡り歩く

○あらすじ

- ・時間 : 1970年ごろか。物語はある日の早朝から夜までの一日。
- ・空間 : 地名は架空と思われるが、舞台は전라도のよう。

① 工事場から찬샘まで p407~p412/118

- ・ある早朝、4ヵ月を過ごした工事場を発とうとしていた영달は、정氏から声をかけられる。
- ・話題は영달が滞在していた밥집で主의친氏が妻(청주댁)を殴っていたこと。それはが영달が청주댁と関係を持ったことが原因だった。영달はそれが発覚して逃げるのであった。
- ・영달がどこへ行くのか尋ねると、정氏は故郷である삼포へ行くという。行くあてのない영달は、途中의월출までは同方向だからと彼について行く。
- ・정氏の故郷삼포は南の果ての島。10軒ほどの家があるだけののどかで美しい漁村。2人はそんな話をしながら찬샘の町にたどり着く。

② 찬샘의서울食堂にて p412/119~p415/122

- ・朝のうちに찬샘に着いた2人は、서울食堂で국밥を注文。
- ・食堂は接待婦として置いていた女(백화)が逃げたことで大騒ぎになっていた。食堂の主の女は男たちに女をつかまえてくるよう言いつける。
- ・食堂の主の女は、영달と정氏の2人にも、金と引き換えに女をつかまえてくることを依頼する。

③ 백화를追って p415/123~p419/112

- ・雪が降り始める中월출駅を目指して歩き始めたが、分かれ道で월출への道が雪に閉ざされたことを聞き、감천駅を目指した方がいいと判断。
- ・감천を目指す途中で逃げた백화를発見。連れ帰ろうとする영달に백화는反発し、見ていた정氏は同情心から連れ帰らないことを約束する。
- ・백화는3年前に出た南の故郷に帰ること、백화という名も仮名であることなどを話す。

④ 감천駅まで3人での語り合い p419/113~p423/115

- ・감천駅への道を歩きながら、백화는故郷を出て以来、体を売りながら生活してきたなどの身の上話を始める。
- ・途中の廃屋で休憩。恋愛の話題となり、백화는かつて働いた“갈매기집”で、隣接する軍監獄から出所した8人の軍人を愛したことを話す。
- ・再び歩き出し、ハイヒールで歩きにくい백화를영달が背負って歩く。

⑤ 감천駅で p423/116~p426

- ・午後7時ごろ、감천の町に到着。백화는영달に「行くあてがないのなら、自分と一緒に故郷に行かないか」と誘う。정氏も、この際放浪生活を止めてはどうかと、영달に백화의故郷へ行くことを勧める。
- ・영달は自分にはそんな能力はない、정氏とともに삼포へ行くとする。手元に残った金で백화のために汽車の切符とパンを買い、2人は백화を見送る。
- ・別れ際、백화는本名が이점례であると告げる。
- ・2人が後続の汽車を待っていると、老人にどこへ行くのかと声をかけられ、삼포へ行くと説明。
- ・老人から삼포が観光地として開発され大変貌を遂げていると聞き、2人は驚く。「仕事が見つかる」と喜ぶ영달に対し、정氏は心の拠り所を失ったまま汽車に乗る。

○感想

高度経済成長社会から疎外され、行き場を失って生きている人々の気持ちを丁寧に洗い出していると感じた。登場人物たちは、目の前の暮らしに追われながらも、どこか優しさを失っていない。

先の見えない暮らしの中で彼らの心を支える存在が故郷であり、ラストでそれさえも失うことの衝撃と残酷さが伝わってきた。